桜の聖母学院新聞

発行所
福島市野田町七丁目11番1号
桜の聖母学院高校新聞部

西内新理事長先生に聞く

小さくとも教育で輝く総合学院に

今年1月、桜の聖母短期大学学長の西内みなみ先生が、桜の聖母学院全体の理事長を兼務するという発表があり、一般新聞各紙でも大きく報じられた。その後3月に短大学長を定年退職なさった西内先生は、新年度からは理事長専任となって、いよいよ桜の聖母学院約90年の歴史の中で大きな節目となる大改革に着手する。私たち高校生は全員、入学直後の1年次の錬成会講師としてお目にかかっている西内先生を、花園町（はなぞのちょう）キャンパスの理事長室に訪ね、現時点で公表できる範囲での改革の内容や、学院の将来構想などをうかがった。

花園町の理事長室でインタビューに答える西内理事長先生

本校の高校生は全員一度はお聞きしているのですが、西内先生のプロフィールを改めて教えてください。

出身は愛知県豊橋市です。と聞けば皆さん、2020年のNHK朝の連続テレビ小説「エール」でおわかりでしょう、福島市の生んだ作曲家・古関裕而氏の妻、金子（きんこ）さんの出身地です。ただ「エール」の放映が決定した時、私はたまたま福島から豊橋に帰省したのですが、福島駅では号外が配られて大盛り上がりだったのに、豊橋はいたって普通でした（笑）。でもその後から両市の交流が進み、豊橋でも知られるようになりましたが。

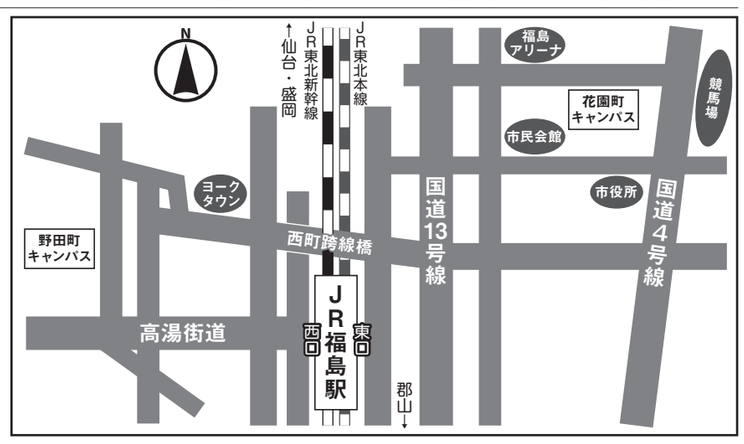
お若い頃はどんなお子さんだったのですか？

負けず嫌いで、とにかく何でもやってみたい、そして引き受けたからにはとことんやり遂げるという性格でした。中学校では生徒会長、県立時習館高校でも文武両道の高校生活で、医師を志望して隣県の国立浜松医科大学を目指していました。でも現役での受験に失敗し、父が浪人は許してくれなかったので東京女子大学文理学部に入学、そこで心理学に出会いました。

大学時代には上智大学の宗教講座を受講したり、アジアの大学生で交流する「I. S. A.（International Student Association）」という学外サークルで活動したり、バックパック一つで東南アジアを旅行したり、とにかくできることを何でもやりました。そして大学の先生から、私が研究したいことは東大の大学院でしかできないと教えられて、東京大学大学院教育学研究科に進み、同じ研究室の同級生だった現在の夫に出会い、学生（院生？）結婚しました。

福島にいらっしゃることになったきっかけは？

夫が大学院を修了した1989年に、いろいろ就職先はあったのですが、当時の福島大学教育学部（現在の人間発達文化学類）からの招へいに、子どもを育てるにも最適の環境と考えて引き受けました。二人の子どもたちも、自然豊かな福島をたいへん気に入ってくれました。私は主婦のかたわら非常勤講師などをしていましたが、日曜日に通っていたカトリック松木町教会のシスターから、桜の聖母短期大学で教えないかとお誘いがあり、1992年から勤め始めて、今に至っています。2016年にはこの短大初の、シスターではない学長となりました。最初は「本当に私でいいのですか？」とびっくりしましたけどね。もっとも2018年には、桜の聖母学院中学校高等学校で高城友治先生が、初めてシスターでも女性でもない校長となられたので、時代の流れだったのでしょう。



「50年前までの原点に戻って」

そして今年1月、これまたシスター以外では初めてとなる、桜の聖母学院全体の理事長となられました。2月には理事長就任を伝える一般新聞の記事の中で、「現在野田町（のだまち）にある中高を、花園町に移転して一つのキャンパスに統合する」という構想を述べられ、私たち野田町の中高生も驚きましたが、現時点でお話しただける範囲で、この計画についてお教えください。

ご存知のように桜の聖母学院は、1932（昭和7）年にカナダ・モントリオールから来日したカトリック修道会、コングレガシオン・ド・ノートルダム（CND）の5名のシスターたちが、6年後の1938（昭和13）年に、現在の花園町に「雛菊幼稚園」を開園したことに始まり、今ではこの年を桜の聖母学院の創立年としています。ただこの幼稚園は、太平洋戦争の勃発によって休園を余儀なくされましたが、終戦翌年の1946（昭和21）年に「桜の聖母学院初等学校」が設立され、翌年の学制改革によって桜の聖母学院小学校となって、その後卒業生が出るたびに順次中学校・高等学校・短期大学が開設されていきました。当時はすべて花園町にあったわけです。なお幼稚園と小学校は共学、中学校以上は女子校というスタイルは、当初から今に至るまで変わっていません。

しかし生徒数の増加に伴い、中学校・高等学校を別校舎に分ける必要が生じ、以前からプールやグラウンドとして使用されていた野田町キャンパスに、1975（昭和50）年に野田町校舎が開設され、中高が移転しました。時代の流れでやむを得なかったとはいえ、キャンパスが分かれることによっていわゆる一貫教育が弱くなってしまったのは否定できません。生徒たちの意識もですが、教職員も幼小短大に勤める先生方と中高の先生方が、顔を合わせたり一緒に仕事をする機会が、ほとんどなくなってしまいました。

野田町キャンパスには1989（平成元）年に、講堂とその下の第一・第二ホールが完成。講堂のロールバック（収納式階段座席）は当時東北地方唯一で、体育館としてもホールとしても使える、今でも自慢の設備です。1994年には生徒数がピークを迎え、高校900名超、中高合わせて1300名近い規模になり、翌年には高校校舎西側に、3階コンピューター教室と1・2階の普通教室、西トイレを増設、高校は一時ひと学年7クラス体制と、大きく発展していきました。当時は1946年の桜の聖母学院初等学校の発足を本校の創立としていたので、翌1996年には桜の聖母学院創立50周年を、福島県文化センター（現とうほう・みんなの文化センター）で、全学院あげて盛大にお祝いしました。

しかしその後は全国的な少子化の傾向に加え、13年前の東日本大震災と福島第一原発事故の影響もあって生徒数が減少していき、一方で来年に築50年を迎える野田町校舎の老朽化は、皆さんの目に見えないところで進行しています。幸い女子校ということもあって、たいへん綺麗に保たれてきましたが、今後修理や改築を施しても、かつての規模で中高を存続することは不可能です。であるなら、50年前までの原点に戻って、幼稚園から短大までを花園町キャンパスに再集約し、小規模でも地域社会から必要とされる総合学院として、4年後の90周年以降も存続していこう、というのが現時点の構想です。

すでに幼小短大がある花園町キャンパスに、どのように中高を統合するのですか？

この点が最も大きな課題です。花園町キャンパスの限られた土地に、どうやって中高を移転させるのか、現在様々な検討を重ねています。公表できる時が来ましたら…。

移転を機会に、中高の共学化といった計画はあるのでしょうか？

現在日本の義務教育は中学校までですから、小中一貫の義務教育の学校は自然な形だと思います。また福島では、中学校までは地元の公立で過ごし、高校は各自に合った多様な学校を選択するという流れが強いですから、本学院でも小中一貫の形で中学までを共学とし、高校については現在のニーズを生かして、県北地区唯一の女子校のままで行くという考え方もあると思います。それとも高校もいっそのこと共学化するか、目下教職員の皆様と最善の道を検討中です。

私たち現役生徒が一番気になるのは、それがいつになるのか、私たちが花園町の新校舎に通うことがあるのかということです。また現在の野田町キャンパスは、どうなるのでしょうか？

今のところ、野田町に桜の聖母学院の一部が残ることは考えていません。ですので野田町キャンパスの売却の目途がつくことが大前提となりますが、学院創立90周年となる2028年には移転できればと希望しております。ですから少なくとも現在の高校生の皆さんは、卒業まで野田町キャンパスで学ぶことになるので、ご安心ください。これからも桜の聖母学院が、少人数だからこそできる教育で輝く、また県北地区唯一のカトリック校・県内唯一の総合学院であることを強みとして、100周年、150周年をこの花園町で迎えていくことが、私たちの使命と考えています。

理事長室前の聖母子像を囲んで

校歌

美しきわがまなびや
山脈はめぐりて高きその姿
黄金なすそのやすらいに
汝をば育み
黄金なすそのやすらいに
みそらはほほえむ

紙面紹介

2面
●東京芸術大学キャンパス見学記
●「おれたちの伝承館」に行ってみた
●カナダ修学旅行成立
●学生時代・片平先生

春の全国選抜3位の卓球部の躍進

この新聞の前号発行直後の3月下旬、本校卓球部が創部以来の快挙を成し遂げた。全国高等学校選抜卓球大会で、女子学校対抗3位に輝いたのだ。発行スケジュール上、半年も間が開いてしまったが、ここではそれ以降の戦績も含め、本校卓球部栄光の軌跡を振り返る。

前号でお伝えした通り、1月にサッカー部監督が急きょ卓球部監督を務めて東北大会を制し出場を決めた、第51回全国高等学校選抜卓球大会は、3月21～24日に山形県総合運動公園体育館で開催された。予選リーグを早田ひな選手の母校・九州ブロック2位の希望が丘高校に3―1で勝利するなど、3勝0敗で通過。決勝トーナメントの1回戦では、九州ブロック1位の明豊高校に3―1で勝利して昨年秋の国体のリベンジを果たし、ベスト8入り。

続く2回戦は関東ブロック3位の強豪・武蔵野高校を相手に大接戦となったが、2―2で迎えた最終第5ゲームで本校選手がまさかの鼻血を出し、止血タイムのおかげか流れが変わって、フルゲームデュースを制し堂々のベスト4入りを果たした。この時点で3位以上が確定し、準決勝では関東ブロック1位の横浜隼人高校に敗れたものの、ついに悲願であった全国大会の表彰台に立った（写真）。

夏に佐賀県で開催された全国高校総合体育大会でも、春に続く快進撃が期待されたが、全国3位の学校に対するマークは厳しく、学校対抗では同じ東北のライバル・八戸工業高校に初戦で敗れ、ダブルスとシングルスでも思うような結果は残せなかった。この雪辱をぜひ、秋の国民体育大会改め国民スポーツ大会で晴らして欲しい。

桜華祭 連続2年 完全開催！

ここ数年はコロナ禍のために中止や非公開・縮小開催などが続いていた、本学院中学校高等学校の公開文化祭「桜華祭」は、昨年4年ぶりに従来の形に戻って開催された。今年も2年連続コロナ前の形で、8月31日（土）・9月1日（日）に開催され、県北地区唯一の女子校は多くの来場者で賑わった。

毎年公開文化祭として開催されてきた本校の桜華祭だが、コロナ元年の2020年には生徒たちだけの仮装大会、翌年は第5波の襲来とぶつかり全面中止に。2022年にようやく、来場者を現役生徒の家族と桜の聖母学院幼稚園小学校の児童保護者のみの内部公開として再開。そして新型コロナウイルスが感染法上の5類に移行した昨年、1日目午後に生徒家族など入場券を持つ人のみの内部公開、2日目は全日誰でも入場できる一般公開という従来の形に戻り、今年は昨年に続きその完全な形での開催となった。マスクの着用も普段の学校生活の中でも任意となったため、生徒も来場者も笑顔はじける桜華祭を、久しぶりに楽しんだ。

とはいえ多少の制限も残り、コロナ前は高校3年生が行うことが恒例になっていた食品販売は今年も見合わせとなり、本校保護者会「桜の会」が担当する体育館内での既製品の販売と、プロの業者のキッチンカーに限定された。寄付された日用品を安価で販売する「バザー」も引き続き行われていない。各クラス内の展示も、密閉が必要なお化け屋敷系は安全面の理由も含め禁止で、会場の換気への配慮はコロナ以降のニューノーマルとなっている。

そのような制限の中でも、今年のテーマ「青春短し煌めけ乙女」のもとに、各クラスや部活動が精いっぱいの工夫を凝らして準備を重ね、1日半の公開で昨年の1204名を上回る約1300名の来場者に、大いに楽しんでいただいた。

中でも際立っていたのが、内部公開も含めて3回目と経験豊富で、しかも最後の桜華祭となる高校3年生の気合の入りようだ。本格的に改装された教室内で、体験型の没入感ある企画を提供した。来場者と生徒教職員がオンラインで投票する「桜華祭大賞」は、そんな3年生が上位を独占し、3年3組の「犯人は誰だ！廃校からの脱出」が見事大賞に輝いた（写真2）。

この野田町校舎や、まだまだ使える立派な講堂（写真1）で開催する桜華祭もあと数回かと思うと、感慨もひとしお。今回も幅広い年代の卒業生が来校し、懐かしい母校の雰囲気や、転勤のない私立ならではの昔の恩師との再会を楽しんでいた。たとえ校舎が移転しても、本校が続く限り桜華祭も続いていってほしい。

オープニング恒例のジェット風船は、今年も口ではなくポンプで空気を＝写真1

桜華祭大賞に輝き高城校長先生から表彰された3年3組＝写真2

ルワンダの悲劇から30年―

マリールイズさん 本校で講演

桜の聖母学院中学校高等学校では、7月2日の創立記念日の前後に毎年「創立記念行事」を行っているが、今年は本校の元保護者で福島では知らない人のいない、ルワンダ出身の永遠瑠（とわり）マリールイズさんをお招きし、7月11日に生徒全員で講演をうかがった。

創立記念行事で講演するマリールイズさん

アフリカの中央部、四国の約1・5倍のルワンダ共和国では、ツチ族とフツ族が共存していたが、1994年4月の大統領機撃墜事件をきっかけに両民族の武力抗争が勃発、100万人以上の犠牲者を生む悲劇となった。

洋裁教師をしていたマリールイズさんは、その前年に海外青年協力隊のカウンターパートナーとして来日、福島で10か月間洋裁を学び、ルワンダに帰国した直後にこの内戦に巻き込まれた。自宅近くにも砲弾が落ちるようになり、3人の子どもを連れて徒歩で約50㎞離れた難民キャンプに避難。そこから福島のホストファミリーに日本語でファックスを送って無事を伝えようとしたところ、その紙が岡山の医療NPO「AMDA」から派遣されていた日本人医師の目に偶然留まり、にわかに通訳を引き受けることとなった。

しかし難民キャンプでは子どもたちが赤痢に罹り、AMDAの医師の治療で一命をとりとめるなど、日に日に状況が悪化して行った。日本では福島で研修生時代の友人たちを中心に「ルイズ一家を支える会」が発足、一家を日本に迎え入れられないか模索が続いた。だが日本の難民認定率は当時も今も1％前後と狭き門のため、難民としての滞在許可取得は絶望的。そんな時に「マリールイズさんを聴講生の留学生として受け入れましょう」と手を挙げたのが、桜の聖母短期大学だったのだ。

このエピソードを聞いた生徒の中には「桜の聖母学院を誇りに思った」という感想もあった。留学生ビザを手にしたマリールイズさんは、家族を伴いその年の12月に再来日。その後めでたく桜の聖母短大を卒業し、女のお子さん2人も本学院中学校高等学校の卒業生となった。

以来福島を拠点としながら、ルワンダの復興のために活動を続け、2000年には「NPO法人ルワンダの教育を考える会」を設立。きっかけはルワンダに一時帰国した時、水汲みをしていた幼い子どもたちに「大人になったら何になりたい？」と聞いたところ、「おばさん、僕たち大人になれると思う？」と答えが返ってきたことだった。この会の支援で2002年首都キガリに「ウムチョムィーザ学園」が創設され、500名以上の卒業生を送り出してきた。自身は2012年に日本国籍を取得、永遠にルワンダを忘れないとの思いで、日本名を永遠瑠（とわり）とした。

ルワンダの悲劇から30年となった今年、日本各地で講演に招かれ、平和の尊さや教育の大切さ、そして今も問題になっているフェイクニュースの怖さなどを、実体験をもとに流暢な日本語で語っている。世界各地で再び戦争・紛争が起こり始めている今、貴重なお話を聞く機会となった。

はりこみ

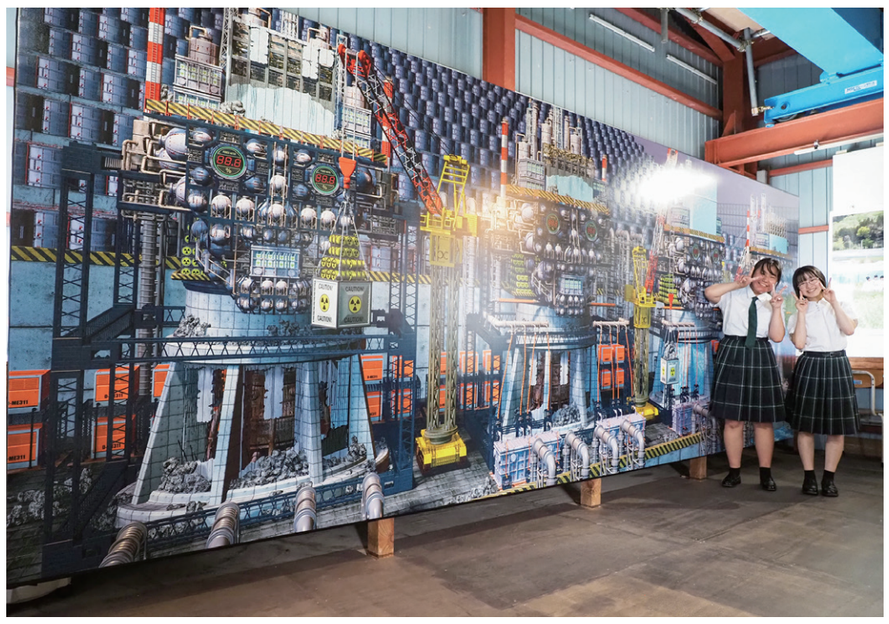
▼2年半以上続くロシアのウクライナ侵攻と、来月で1年となるイスラエルとハマスの戦闘の中、「平和の祭典」第33回夏季オリンピックが、7月26日～8月11日に開催された。花の都パリを舞台に行われるのは1924年以来100年ぶり3回目だ▼競技場ではなくセーヌ川を選手団が船で「行進」する開会式では、その奇抜な演出にいきなり賛否両論が渦巻いた。自分の生首を手に歌うマリーアントワネットもさることながら、多様性の象徴を意図したというドラァグクイーンやダンサーらによるパフォーマンスが名画「最後の晩餐」を連想させ不快といった批判が相次いだ▼一方で難病により2年間活動できなかったモントリオール出身の歌姫、セリーヌ・ディオンが最後にシャンソンの名曲「愛の賛歌」を熱唱すると、世界は驚きと感動に包まれた。モントリオールを拓いた女性、マルグリット・ブールジョワを創立者とする本校の生徒も、改めてカナダ東部のフランス語圏とフランス本国との繋がりを感じたのではないだろうか▼しかし競技が開始されると、疑惑の誤審に始まり表記ミスや選手村の環境の悪さ、そしてセーヌ川で強行されたトライアスロンで一部選手が体調を崩すなど、多くの課題を残した。だが引き続き8月28日より開催されたパリパラリンピックでは、むしろ爽やかな感動を呼ぶ場面が多く、パラスポーツの魅力や真の多様性を、改めて世界に示せたと言えよう▼その終了後、世界の目は一転してアメリカ大統領選挙に注がれている。4年前と同じ民主党の現大統領バイデン氏と、共和党の前大統領トランプ氏という後期高齢白人男性同士の対決と思われていた構図が、この夏に劇的に変わったのだ▼誰もが81歳のバイデン大統領に不安を抱く中で、7月13日に衝撃的なトランプ銃撃事件が起こり、一命をとりとめたトランプ氏の人気が一気に高まって、ついにバイデン氏が選挙戦からの撤退を決意。副大統領ハリス氏を後継者に指名した▼ジャマイカ出身の父とインド出身の母を持つ女性ハリス氏は、まさに多様性の象徴。さらにトランプ氏より約20歳も若く、当選すれば米国初の女性大統領となる。時代は、世界は大きく変わっていっている。果たして我が日本はどうだろうか。

「おれたちの伝承館」に行ってみた

13年前の東日本大震災の後、被災地には震災の記録や教訓を伝える様々な施設が建設された。福島県では国などの支援で2020年に双葉町に開館した「東日本大震災・原子力災害伝承館」が有名で、学校行事などで訪れた人も多いだろうが、同じ伝承館でも市民手作りの美術館が、南相馬市小高区にある。その「おれたちの伝承館」には、本校で美術を教える片平仁先生の作品が展示されていた。

今年から7月から5月に開催時期が変更された「相馬野馬追」で全国的に有名な南相馬市は、2006年に「平成の大合併」の一環で、それまでの原町市と相馬郡小高町・鹿島町の一市二町が合併して誕生した。

2011年3月11日の東日本大震災では津波で多くの犠牲者を出し、さらに小高区は福島第一原発事故による避難指示区域にも指定されたが、2016年7月に解除され、徐々に住民も戻ってきている。2018年4月には芥川賞作家・柳美里さんが、JR常磐線小高駅前に書店「フルハウス」を開店、新聞部でも同年7月に一度取材に訪れ記事にしている。



2階の壁一面を埋める片平先生の作品「原発頭」＝写真1

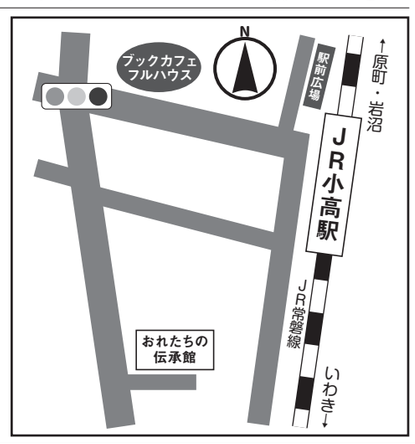
2020年3月には、JR常磐線が津波と原発事故の影響から復旧し、全線で運転を再開。それを記念して新聞部では、翌年1月に得意の各駅停車一日乗り放題「青春18きっぷ」を使って、福島駅から東北本線でいったん北上し宮城県の岩沼駅で常磐線に乗り換えて南下、いわき駅から磐越東線に乗り換え、郡山駅から東北本線で福島駅に戻るという「中通り浜通り一周日帰り各駅停車の旅」を実行。この時は双葉駅で途中下車し、開館間もない「東日本大震災・原子力災害伝承館」を訪れ取材、記事にした。そして今回は再び同じルートながら、小高駅で途中下車し、昨年7月の開館から1周年を迎えた「おれたちの伝承館」を訪問させていただいた。

8月初旬の猛暑まっただ中、小高駅から炎天下を徒歩約10分。「おれたちの伝承館」は、双葉町の巨大な伝承館をイメージしているとうっかり通り過ぎてしまいそうな建物だが、アーティストの手作り感満載ののぼり旗や横断幕などで、ひと目でそれとわかる（写真2）。そこで私たちを出迎えてくださったのは、カトリックの修道会「援助マリア修道会」のシスター・佐々木康予さんだった。

広島県福山市に本部を置くこの修道会は、2018年3月に小高区に「南相馬修道院」を開設、以来この地域の復興のために、その名の通り様々な援助活動を行ってきた。その一つがこの伝承館の受付・案内係で、カトリック学校の生徒の訪問とあって温かく歓迎してくださった。聞けば、この夏にも日本各地のカトリック高校の生徒が泊りがけで南相馬市にボランティアに訪れているとのことで、ただ取材に来ただけの私たちにとっては、少々恥ずかしくなるお話だった。

大きな倉庫を改装した伝承館本館には、震災と原発事故をテーマにした国内外の様々なアーティストの作品が展示されているが、私たちの目当ての片平先生の作品は、二階の階段を上がった目の前にあった（写真1）。福島第一原子力発電所そのものをモチーフにした『原発頭（あたま）』というこのCG作品は、壁一面を占める超大作で、その緻密で無機質な描写と背景に並んだ無数の処理水貯蔵タンクが、原発事故の深刻さを見る者に訴えてくる。片平先生は6月にこの作品の前でシンセサイザーを駆使したサウンドパフォーマンスも開催された、とシスター佐々木に教えていただき、芸術の力でこの震災と原発事故を未来への教訓にしようとするエネルギーが感じられた。

入り口のコンテナに掲げられた横断幕＝写真2



市民の手作りで開設・運営されている「おれたちの伝承館」は、入場無料だがカンパを募っており、長期運営のためのマンスリーサポーターも募集中とのこと。ぜひ一度訪れて、少しでも運営を支えていただきたい。今回の私たちのようにわざわざ宮城県回りで各駅停車を乗り継いで行かなくても、福島交通のバスが福島駅～原町駅間を片道2時間で結んでいる。

伝承館を後にした私たちは、これまた徒歩10分圏内にある「フルハウス」を訪れ、最近併設されたお洒落なカフェで、ランチをいただいた。柳美里さんはアメリカに短期留学中とのことでお目にかかれなかったが、2020年に「全米図書賞」を受賞して大きな話題になった『JR上野公園口』に続く新作の数々も並んでおり、ここもまた小高区の名所として、末永く続いていってほしいお薦めスポットだ。

苑子先輩の案内で行く 東京芸術大学キャンパス見学記

昨年春、長い歴史と伝統を誇る国立唯一の芸術大学・東京芸術大学に、本校から7年ぶりの合格者が出た。箏（そう）の名手として在学中から全校に腕前が知れ渡っていた、その高橋苑子（そのこ）先輩を、真夏の「上野の音楽学校」に訪ねてキャンパスを案内していただき、音大生の生活や将来の展望などをうかがった。東京往復はもちろん、新聞部の定番「青春18きっぷ」での各駅停車日帰り旅だ。

東京芸術大学音楽学部正門にて、高橋苑子先輩と

近代日本芸術教育の最高峰

かつては東北地方から東京へ出る時の玄関口となっていた上野駅。駅前に広がる上野公園には、パンダで有名な上野動物園をはじめ、東京国立博物館や都美術館などが立地し、我が国の文化教養の一大中心地だ。

その由緒ある上野の森の一角に、明治以来140年にわたり日本の芸術教育を最先端で担い続けてきた、東京芸術大学がある。とはいえ現在の、音楽学部と美術学部の二学部から成る一つの大学の形となったのは、戦後の昭和24（1949）年のこと。そのルーツをさかのぼれば、明治15（1882）年創立の東京音楽学校と、明治20（1887）年創立の、東京美術学校の、二つの官立学校にまでたどり着く。

音楽学部の前身である東京音楽学校は、日本初の本格的コンサートホールである明治23年建築の奏楽堂を備え、古くは滝廉太郎や山田耕作といった日本の近代音楽草創期のレジェンドを輩出。戦後に活躍した卒業生には歌手の藤山一郎や、作曲家の芥川也寸志に檀伊玖磨、そして昨年他界したミュージシャン坂本龍一など、枚挙にいとまがない。一方美術学部の前身である東京美術学校は、西洋絵画のみならず、明治初期に忘れられがちになっていた日本の伝統美術の価値を守り育てるべく、フェノロサや岡倉天心らによって設立された。美術学部で教鞭をとった日本画家の平山郁夫が、東京芸術大学全体の学長を務めたことも有名だ。

なお音楽学部は、附属の音楽高校があることもあってか現役での進学率が高いのに対し、美術学部には何年も浪人して合格する人が多いなど、それぞれの学部ならではの特徴が。東京芸大ではキャンパスを「校地」と呼ぶが、音楽学部は基本的に4年間上野校地で過ごす一方、美術学部は1年次を茨城県の取手校地で学んだ後、一部の学科を除き2年次から上野にやってくる。

「屏風坂通り」を隔てて音楽学部と美術学部に分かれる上野校地の、音楽学部側の正門（写真）には、門が閉まった後にも出入りできるように、「猫扉」の人間版?が付いている。個室でレッスンを続ける学生が、閉門時間をうっかり過ぎてしまっても校内に閉じ込められないための配慮で、寝食や時間を忘れて稽古に没頭する芸大生ならではの事情だ。校舎の中はピアノ一台ともう一人が入れる程度のスペースのレッスン室が並び、防音も施されているので、これでは確かに外界と遮断されてレッスンに没頭しているうちに、時間を忘れてしまうのもうなずける。その他にも大きな楽器が入る特大のエレベーターや、能楽の舞台がついたホールなど、芸大ならではの設備が随所に。

芸大を目指すために桜の聖母へ

高橋苑子先輩は4年半前に、福島大学附属中学校から推薦で桜の聖母学院高校特進コースに入学した。第一志望で桜の聖母を選んだ理由の一つは、女子だけの環境で気兼ねなく箏の稽古と勉強に打ち込めると思ったから。確かに男子と一緒の共学だと、男子の目はもちろん男子がらみの事で同性の女子の目が気になったり、もちろん「それこそが青春」と楽しむ人には魅力だが、本当にやりたいことがある人はそちらに集中しづらくなるという話は、前号で取材した福島県立医大医学部の山村桃花先輩も語っていた。

今たまたま埼玉県で男女別学の県立高校を残すかどうか議論が沸騰しているが、すでに共学の高校もたくさんあるのだから、共学が良い人はそちらを選べばいいだけの話ではないだろうか。すべての県立高校を共学化すると、「男女別学の高校に行きたい」という選択肢がなくなってしまい、それこそ今必要とされる「多様性」に逆行するのではないか。もっとも公立高校が共学化されても、別学の私立高校が残れば、それこそ私立の多様性が輝くことになるが。福島県の県北地区で唯一の女子校・別学校である桜の聖母も、そうしたニーズに応える女子校であり続けてほしい。

苑子先輩は本校入学後、桜華祭やクリスマス行事で、その見事な箏の腕前を全校生徒の前で披露する一方、勉学と毎日6～7時間の箏の稽古に思う存分集中し、昨年春に見事現役で東京芸大音楽学部邦楽科箏曲生田流専攻に合格を果たした。本校から東京芸大へ合格は、2016年春に同じく音楽学部邦楽科箏曲の、もう一つの山田流専攻に合格し、2019年に教育実習に来た佐竹詩音先輩以来、7年ぶりだ。

現在苑子先輩は2年生だが、すでに大学院進学を目指して昼も夜も稽古を続ける日々。幸い自宅アパートにも箏があって防音が施されているので、気兼ねなく練習できる。大学の中では洋楽より邦楽の方がはるかに上下関係が厳しく、挨拶などもおろそかにはできないなど、芸大ならではの伝統が息づいているそうだ。

苑子先輩に高校生活と現在の芸大生生活を振り返ってもらって、私たち誰もが印象に残った言葉がある。高校時代には意味がないと思ったり、無駄ではないかと感じた勉強の中でも、今思えば役に立ったものもある。何より嫌なことを頑張ってやり遂げたこと自体が、その後の生活の中で大きな自信となっている。だから高校生の間は、目の前の課題から逃げずに全力で取り組むことが、後になって必ず役立つということ。東京の梅雨明け直後の猛暑の中、常に後輩の私たちを思いやる優しさと、テキパキと質問に答える先輩のかっこよさに、憧れすら感じる貴重な取材となった。

来秋のカナダ修学旅行成立

本校ゆかりのカナダ東部・フランス語圏のケベック州などを訪れる修学旅行は、2018年入学の生徒に、海外（カナダ5泊7日）か国内（九州3泊4日）かで希望の行き先を選択してもらい、2年次の2019年10月中旬に初めて実施された。

モントリオール市役所横に建つ、本校創立者マルグリット・ブールジョワ像を囲む、2019年の参加生徒

海外組53名の出発当日は、あの台風19号「東日本台風」の襲来と重なって交通機関は停止、乗る予定の飛行機もカナダから飛んでこなかったにもかかわらず、奇跡的に全員が無事カナダに渡って旅程をこなすことができた。

次の学年も海外／国内の選択は終わって費用の積み立ても進んでいたが、2020年初めからの新型コロナウイルス流行により、この年の修学旅行は海外はもちろん国内も中止に。翌年は能登金沢方面へ2泊3日で実施。2022年からは長崎を中心とする九州3泊4日にまで戻し、全員同じ行き先で実施されている。

そしていよいよ今年入学の学年から、海外／国内の選択修学旅行を再開する運びとなったが、この学年の全生徒数は66名、海外が成立する目安は30名で、その人数に達しなければ全員これまで通り国内＝九州となる。しかもコロナ後の世界的インフレーションと円安により、費用はコロナ前の約1・5倍に。この高いハードルにもかかわらず、5月末の最終調査の結果31名が海外を選択し、来秋6年ぶりのカナダ行きが実現することとなった。

もちろんこの選択修学旅行はこの学年限りではなく、来年以降も継続予定。来春少しでも多くの新入生が入学し、インフレや円安も収まって、引き続き30名以上が海外＝カナダを選択し、創立者が造った街・モントリオールを本校生が毎年訪れることを願いたい。

私の学生時代

片平 仁先生の巻

私の学生時代は、端的に言えば曇りのち晴れ、だろうか。入学した福島大学は第5志望だった。が、翌年に5教科7科目必須の共通一次が導入されるという浪人不可の状況のモヤモヤの中、私の学生生活は出発した。入学後も違和感は続いた。落ち武者感で下を向いて歩いている自分は、本当に情けなかった。教育学部だったので専門科目は広く浅くで、残念ながら物足りず、大学から徐々に足が遠のき、一人自宅で作品を制作する日が増えていった。先生方から見て、生意気で厄介者の不良学生と映ったに相違ない。

晴れの光は、大学3年の秋に突然やってきた。福島民報社が2週間の日程でヨーロッパに取材チームを出すという企画があり、派遣要請が大学に来たのだが、先生方は不良学生の私を推薦してくれたのである。かくして、秋の美しいヨーロッパを周遊する豪華な旅は、民報社の記者の方を中心とする4人でスタートした。空港にはベンツが迎えに来て、豪華ホテルに宿泊し、かつてのお貴族様の邸宅に招かれるなど、目の眩む内容だったが、私が最もクラクラしたのは言うまでもなく、生で初めて見る西洋の名画作品だった。ルーブル、プラド、バチカン等、名品の数々に完全にノックアウトされた。

旅行後、手記を原稿用紙50枚にまとめ、撮影した写真と共に民報社に提出。後日旅行記は新聞に連載となったが、旅で得た感動は収まらない。現地で作品研究や模写をしたい、悶々とした毎日が続いた。大学3年の年度末、先生方に認めていただいた繰り上げ年度末試験後の2月半ば、私はろくにフランス語を話せないままで、パリの街角に立っていた。紙の地図だけを頼りにホテルを探し、落ち着いたのは学生街（カルチェ・ラタン）、コレージュ・ド・フランスのすぐ近く、パリで2番目に安いホテルの最上階の屋根裏部屋。もちろんエレベーターなどなし。

毎日のルーブル美術館通いがスタートした。カルチェ・ラタンからセーヌ河沿いを歩き、美術館のドゥノン門から館内へ。右手に大規模な写真スライド売り場があり、その先の地下に降りると、ミケランジェロの「奴隷」2体（現在は美術館中央に移設）があった。画学生以外にほとんど人はおらず、デッサンを自由にすることができた。他の彫刻も同様だが、画学生がデッサンをするに当たり、作品に触れることは許されていた。今では考えられないことだが、私は同様な状況でミロのビーナスを何度もナメナメと触った経験がある（今は絶対に不可！逮捕されます！）。

4月に入り、大学の受講届を出さねばならず、やむなく帰国。自宅にたどり着いた時の所持金は数百円だった。親は「おっ、帰ってきたか。帰ってこないかと思ってた」。その後大学は無事に4年で卒業。ダメもとで受けた教員採用試験はなぜか合格。数年でやめようと思っていた教職は、思わぬ優秀な生徒と出会ったことがポツリポツリと重なり、結果40年以上続いている。縁あって桜の聖母学院で今働かせていただいているが、ルーブルで得た感動と技術を共有したい、才能ある生徒を発掘したい、その思いは今も変わらない。

編集後記

♥東京芸大、桜の聖母短大、伝承館すべての取材に参加し、先輩たちとも仲良くなれてよかった。（石橋グル）

☀東京芸大の取材で、将来について、また努力することの意義について考えさせられた。（鬼越コバホーク）

♠前回の桃花先輩に続き、苑子先輩がすごくかっこよくて、とても憧れてしまいました。（高市ソナエ）

✽初めての東京取材、普段行けない芸大に行って上野のガチ中華でお昼、貴重な経験だった。（上村陽子）

☂花園町への移転、本当なんだと思うととても驚きでした。（河野デジタロ～）

★最後に念願の東京取材に行き、はりこでパリ五輪について書けたので満足。移転しても新聞部は永久に不滅です！（小泉信じろ～）

大学受験対策フェア実施中!
共通テスト対策はできていますか?
大学過去問・各社共通テスト対策など気軽にご相談下さい!
FB N 文化情報発信館 西澤書店
福島市大町7-20
Tel.024-522-0161
Fax.024-522-4139

大切な写真は
●広々とした空間を持つ —ファミリースタジオ—
●緑に包まれた —ガーデンスタジオ—
●絵画が楽しめる —サロンスタジオ—
PHOTO SALON
わが家のメモリーアート
ワタナベスタジオ
〒969-1612 福島県伊達郡桑折町字西大隅3-13
TEL024-582-3152 FAX024-582-3622

福島県知事許可（般-29）第22204号
中小企業IT経営力大賞 審査委員会奨励賞
有限会社 古山鉄筋工業所
専務取締役 古山 吉浩
2級建築施工管理技士
鉄筋基幹技能者
〒969-1761
福島県伊達郡国見町大字藤田字アラ田10-1
TEL (024)585-5129
FAX (024)529-6028
URL https://furuyamatekkin.com
E-mail：furuyama.tekkin@me.com

感動のそばに、いつも。JTB
旅は心の窓を広げます
お問い合わせ・お申込みは下記店舗まで。
—団体旅行—
㈱JTB福島支店
〒963-8004 福島県郡山市中町10-10 メルフ郡山1階
TEL 024-923-0657 FAX 024-933-6620
営業時間 9：30～17：30（土・日・祝日休業）
—グループ・個人旅行—
㈱JTB郡山店
〒963-8004 福島県郡山市中町10-10 郡山ビューホテルアネックス1階
TEL 024-939-3090 営業時間 10：00～18：00（火曜日休業）

創業明治38年（1905年）
地域と共にさらなる1世紀へ
ISO 9001 ISO 14001 認証取得
総合建設業
㈱利根川組
代表取締役 利根川 靖幸
本社
福島県伊達市霊山町掛田字本山57番地1
TEL:(024)586-3121
FAX:(024)586-3122
URL:https://www.tonegawagumi.jp
整備工場
福島県伊達市霊山町字本山56番地
TEL:(024)586-3181